もったいないばあさんと考えよう世界のこと

真珠　まりこ

はじめに

絵本『もったいないばあさん』を作った時、うちに息子が一人いるんですけど、その子が4歳だったんですね。「あれなあに」、「これなあに」とか、「どうしてそうなるの」って、親にいろいろ質問してくる年齢でした。聞かれるたびに上手く答えていたんですけど、ある日、「『もったいない』って、どういう意味？」って聞かれた時に、初めて答えに詰まってしまって、答えられなかったんです。「もったいない」を他の言葉に置き換えて説明しようとしても、別のいい言葉が見当たらなかった。それで、絵本を読んで、何となく意味が分かってくれたらいいなと思って作ったのが、この『もったいないばあさん』です。「もったいない」以外の言葉はすぐに代わりの言葉が見つけられたのだけど、どうして「もったいない」だけが、他の一言で置き換えられないんだろうって考えました。そして、「もったいない」とい

う言葉は、なぜそれを大事に思うのかという理由まで説明しないと分からない言葉だから、一言で言えないんだと分かったんですね。息子が「『もったいない』って、どういう意味」って私に聞いてきた状況は、ご飯を食べ残して、私が「全部食べてね」って言った時でした。「どうして残しちゃいけないの」って聞くので、「だって、もったいないからよ」って答えたんですね。そうしたら、「『もったいない』って、どういう意味」って聞いてきた。「『もったいない』というのは、その食べ物がテーブルの上に並ぶまでには、農家の方が雨の日も風の日もね、田んぼや畑に出て一生懸命耕したりして作った野菜とかお米を、お父さん、朝早く出て行って遅くまで帰ってこないでしょ、そうやって一生懸命働いたお金で買って、お母さんが美味しくなるようにと思ってお料理しているんだけど、そういうのって、残しても平気？　嫌じゃなあい？」って聞いたんです。息子は「んーん。やだ。残したくない」って言いました。「それがもったいないってことなのよ」と話したのですが、「よくわからない」って言う。4歳の子供ですから、そうやって説明が長くなると、もう途中で分からなくなってしまうんですね。それじゃ絵本で何となく分かってくれればいいかなと思って、作ってみることにしました。コピー用紙にマジックで絵を描いて、紙芝居みたいにして作ったものを息子に読んでみると、「おもしろかった。もっかい読んで！」と言ってくれました。

どうして今までもったいないのことを伝えるための絵本が出てなかったんだろうと不思議で、この本は絶対必要と思ったし、他の子供達に読んでみてもみんな「すごくおもしろい」と言ってくれたので、できたダミーを出版社に持ち込むことにしました。そこでOKをいただき、この本は2004年10月に出版されることになりました。私にとっては、4冊目の絵本です。そして、それからすぐ後、2005年2月に、ワンガリ・マータイさんが「MOTTAINAIを世界に！」と言われたことが話題になりました。マータイさんはケニアの元環境副大臣、ノーベル平和賞を受賞された方です。国連で「モッタイナーイ」と宣言されて話題になり、「もったいない」という言葉が脚光を浴びて、この本も急に注目されたことがありました。その後、す

でに連載が決まっていた朝日小学生新聞のほかに、毎日新聞、「こどもエコクラブ」という環境省の子供のための環境教育のニュースなどでも、連載が始まりました。「もったいないばあさん日記」という毎日新聞のコラムは、もう6年も続いています。

私の息子は今、中学1年生。12歳になりました。その子が9歳、小学校4年生のとき、厳しい環境に暮らす世界の子供達の特集番組を一緒に見ることがありました。見終わって、「どう思った？」と聞くと、「あー、自分は日本に生まれてよかった」って言ったんですね。そのときに、「子供ってそんなふうに思うんだ……、自分がそういう目に遭わなくてよかったって思うのか……」と驚いたんですが、息子は「自分さえよければいいと思ったわけじゃなくて、とりあえず自分はそういうところに生まれなくてよかったって思ったんだ」と言っていました。その言葉を聞いて、「でもそれだけじゃなくて、そういう子供達と自分達が繋がっているんだ」って、言いたい気持ちになったんですけど、説明できるほど、私自身が何がどう繋がっているのか分かっていないことに気がつきました。それで、自分も世界の問題と自分達がどう繋がっているか、その関係を知りたいと思い、国連大学の1階にある地球環境パートナーシッププラザを訪ねました。かつて『もったいないばあさん』の本の原画展を開催していただいたご縁があり、相談に行ったんです。環境省と国連大学の方がいらっしゃるところです。そうしたら、その担当の人が、「自分もちょうどそういうことを考えているんです」とおっしゃるんです。そこで、「世界で何が起きているのか、問題と私達の繋がりをまとめて、それを展示できればいいですね」という話になり、「それじゃあ、一緒にやりましょうよ」ということになって、「世界の問題が私達とどう繋がっているか」を教えていただき、展示方法を一緒に考えることになりました。始めてみると、あまりにも大きな問題だったので、最初は、ひとつにまとめるなんて途方もないように思えました。しかもそれを子供達に分かりやすく伝えるようにまとめるのは、本当にむつかしい。説明が長すぎると子供が理解できなくなるし、簡単すぎると伝わらないし。問題の本質に筋を通して伝えないといけない。そんなふうに考え

ているうちに、「世界で今起きている問題は全部、命を一番に考えていれば起きなかったんじゃないか」と思うようになりました。では、命の代わりに何が一番に考えられているのか？

話を最後まで聞いていただけたら分かると思うんですけど、そういうことを話して行くと分かりやすいと思ったんですね。「『もったいない』ってどういう意味？」って子供に聞かれた時は絵本で伝えようと思ったけど、本当はどういう意味なんだろうと思って、私もいろいろ調べました。そうしたら、「もったいない」は、もともと仏教の言葉で、仏教には、「全てのものは仏になる。全てのものには命がある。命のあるものは粗末にしてはいけない」という教えがあり、「もったいない」は命の大切さを伝える言葉だと分かりました。

今、世界で起きている問題は、命をまず一番大切に考えていたら起きなかった。だからこそ、「もったいない」という言葉をキーワードにして、もったいないばあさんがガイド役になって伝えたら、子供達も聞いてくれるのではないか、そうすれば分かりやすく伝えられるのではと思って始めたのが「もったいないばあさんのワールドレポート展」です。地球環境パートナーシッププラザの人達と一緒に始め、写真やデータの提供などは、国連の機関であるユニセフさんに相談し、ご協力いただくことになりました。これからのお話の中で子供達の話が出てきますが、そのお話はユニセフのホームページで紹介されている実話をもとに私がお話を作り、イラストを描いたものです。地球の問題に巻き込まれている子供達の話。この展示会は、2008年より全国を巡回しています。

もったいないばあさんのワールドレポート展について

では、「もったいないばあさんのワールドレポート展」の話をこれから始めさせていただきます。子供達に話をする時にはまず、この地球の画像を出します。子供達も「世界」というものをみんな知っているものだと思っていたんですが、世界地図を習うのは、小学4年生か5年生になってからだ

そうで、低学年の子達は、「世界」という言葉は知っているけれども、実はあんまりピンと来ていないらしいと分かりました。そこで、まず、この地球を出して、「これは地球です。私達は、宇宙に浮かぶ、この地球という星の上に住んでいます。地球の上には、私達が住む国日本以外にもたくさんの国があって、それらの国を全部合わせて『世界』と呼んでいます。これから紹介する話には、みんなが聞いたことがある国の話も出てくるけれど、聞いたことがない、どこにあるのか知らない国の話も出てくると思います。それでも、みんな同じ地球に住む地球人、地球のお友達の話だと思って聞いてください」とお話します。地球で起きている問題を10に分けて、それをお話してから、その問題に巻き込まれている子供達の話をさせていただきます。

1　天気がおかしい

まずは、地球で起きている問題の1番目「天気がおかしい」。ちょっと難しい言葉で言うと「気候変動」。「気候変動」という言葉は大人には分かるけど、子供達には難しいので、「なんか最近天気がおかしいってニュースとかで聞くよね。猛暑の日が続いたり、大きな台風がきたり、雨が降る時に降らなかったり、大雨が降ったり」と話します。具体的に言うと分かるようです。そしてそれは、日本だけじゃなくて世界で起きていることです。気候変動の現象のひとつに地球温暖化がありますが、台風が大きくなっているのも温暖化が原因と言われています。それは気温があがって、海で蒸発する水蒸気の量が多くなったために、台風が大きくなると考えられているそうです。2009年、ミャンマーで起きたサイクロンの被害では、高波と暴風雨で村ごと流されたりとか、東北地方の震災で津波の被害があったように、畑ごとだめになってしまったりするような被害があって、作物が収穫できなくなることを心配されていました。天気がおかしくなって心配なことのひとつは、作物が取れなくなって食料が足りなくなることです。幸い、そのミャンマーのサイクロンでは全てがだめになったわけではなく、人々が飢えることはなかったのですが。気温が上がって、南極や高い山の

氷河が溶けていることも心配されています。ヒマラヤの氷河の話では、子供達に話す時には、「ヒマラヤという高い山があって、その上には氷河と呼ばれる大きな氷が乗っています」と話します。気温が上がって、その氷がはやいスピードで溶けてしまうことが心配されています。何が心配なのかと言うと、ヒマラヤの氷は少しずつ溶けて川を流れていて、その下にはデルタ地帯と呼ばれている豊かな土地が広がっています。そこはみんなの食べ物を作っている穀倉地帯が広がっているんですね。その手前に「氷河湖」って呼ばれている天然のダム、湖があるんですけど、急に気温が上がって流れてくる水がたくさん増えすぎると、湖の水が溢れて下の村や畑が洪水被害に遭ってしまいます。このように、まずは洪水の被害が心配されていますが、その後、氷が全部溶けて流れてしまったら、もう川を通る水が無くなってしまうことも心配されています。

氷河はこれまで少しずつ溶けて、川を流れて、その下に広がるデルタの畑を潤してきました。でも氷が溶けてしまっては水源が無くなるわけですから、流れてくる水が無くなってしまう。デルタ地帯を潤す水が無くなってしまう。将来このまま氷が溶け続けていったら、畑をうるおす水が無くなるから、作物が獲れなくなってしまう。天気がおかしくなって何が心配なのかというと、作物が獲れなくなり食料が不足するのではということが心配されているのです。

「最近おかしな天気が多いけど世界の問題にも関係があるようじゃね。地球は丸く繋がっているからね」ともったいないばあさん。このように、問題の説明の最後にもったいないばあさんのひとこと、メッセージが出てきます。

2　森が消える

問題の２番、「森が消える」。この写真はアマゾンの熱帯林です。森をまるでバリカンでかりとるように木を切っている写真なんですけど、アマゾンでは今、このようにして大豆畑に変えられるところが多いそうです。どうして森が消えているのかというと、木を切っているからです。こんなふ

うにお金になる作物を植える畑を作るためや、その木材を売ってお金を得るために、元々生えていた木を切っているんです。皆さん木の根っこって、見たことがあると思うんですけど、手を広げるようにはっていますよね。土をかかえているんですね。土の中には栄養分があります。土の中の栄養とか水を吸い上げて、木は大きくなっていくんですけど、その木を切ってしまうと、土をかかえている根っこが無くなって、雨が降った時に土が流されやすくなってしまうんですね。それで、その土と一緒に栄養分も流れて行ってしまって、最終的には作物の取れない荒れた土地になってしまいます。土の栄養というのは川を通って海に流れて行って、海の生き物達も育てているのですが、流れていく栄養が無くなって、その代わりに農薬や化学肥料などが流れてくるようになり、海の生き物もいなくなってしまう。森の木を切ると、土地が荒れて作物が作れなくなり、それと同時に森に住む生き物達も住む場所が無くなったり食べ物が無くなったりで、いなくなる。海の生き物もいなくなる。そこに住んでいる人達も最後には、作物が取れなくなると他の土地に移らなければいけなくなる。だから、そこに住む人も生きものも全てがいなくなってしまう。

牡蠣の養殖をしている人で、養殖する場を豊かにするためには、まず、森を豊かにしなければいけないからと、森に木を植える活動をしている人がいます。牡蠣が育つために必要な栄養分には海にないものがあって、森の栄養分が川を通って流されてきて海の牡蠣を育てていることが分かった。だから、「海の生き物を育てるには森を育てることが必要だ」と思ったそうです。

この写真は、東南アジアの熱帯林です。インドネシアの方では、熱帯林の木を切って、アブラヤシの畑にされるところが多いそうです。そのアブラヤシから取れるパームオイルは、私達の生活にもたくさん入ってきています。例えば石鹸や、インスタントラーメン、スナック菓子などに使われています。

もったいないばあさんのメッセージは、「森が消えるということは命が消えるということじゃ。森を大事にしないなんてもったいない」。

3　生きものが消える

問題の３番、「生きものが消える」。今すごいスピードで生き物が消えています。動物園にいる動物達のほとんどは絶滅危惧種だそうです。去年、COP10という生物多様性の国際会議が名古屋でありました。私も環境省の「地球いきもの応援団」のメンバーになり、この「生きものが消える」問題を特集して、COP10会場で展示とトークイベントを開催しました。もったいないばあさんワールドレポート展パート２の『生きものが消える』です。この内容を収録した本も出ています。だから、生き物が消える問題だけで１時間喋れるくらい話したい内容があるんですが、今日は問題の中の一つとして、短くまとめたお話をさせていただきます。生き物達が、なぜ消えているかと言うと、まず住む場所が無くなってきているんですね。例えば、気候が変わってしまうことで、もともとそこに住んでいた生きものが、条件が合わなくなり生きられなくていなくなったり、人間がその土地を開発することで住む場所が無くなってしまったり。アマゾンの熱帯林や東南アジアの熱帯林が切られてしまうと、そこに住む生き物達は、エサが無くなり、住む場所も無くなって、他に移動せざるをえなくなります。あと外来種、皆さんも聞いたことがあると思うんですけど、ペットとして連れてこられたものを気軽にその辺に放してしまうと、もともと住んでいた生き物達が、外からもっと強い生き物が入ってくることでいなくなってしまうことがあります。生き物というのは名前の知られていないものも、すごく大事だと言われているんですね。自分達とは直接繋がりがないものでも、どういう役割をしているか分からない。大事な役割があるかもしれない。一つの生き物がいなくなると、周りの生き物達もつぎつぎと消えて、みんないなくなってしまうことになるかもしれません。

これはラッコです。アメリカの西海岸では、ラッコを毛皮として獲るためにたくさん捕まえて、数が減ってしまい、絶滅を心配されたことがありました。ラッコが消えてしまった海で何が起きたかというと、ラッコはウ

ニを餌にしていましたが、ラッコがいなくなることで、食べられる心配がなくなったウニが増えてしまったんですね。そのウニはケルプと呼ばれる海藻を食べていたんですけど、ウニが増えることでバクバクその海藻を食べてしまって、海藻が無くなってしまいました。それで、ウニも食べる物が無くなっていなくなってしまった。その海藻の中には、貝やイソギンチャクや小さな魚達がすんで、それをエサにしたり子供を育てたりしていたんですけど、その小さな生き物達も海藻とともに消えてしまった。ラッコがいなくなることでウニが増えて、海藻が無くなり、それが無くなることで結局ウニがいなくなり、海の小さな生き物達もいなくなってしまった。その地域の生き物が全て消えてしまったんです。ラッコのように、命の繋がりの鍵を握る生き物達は、キーストーン種と呼ばれています。キーストーンというのは日本語で「鍵の石」ということになるんですけど、石を積み木みたいに積み上げて作った橋を想像してみてください。その橋の石のひとつをぽーんと抜くと、繋がりが壊れて、橋がばらばらに崩れ落ちてしまう。そういう繋がりの鍵になる石を「キーストーン」と言い、それになぞらえて、命の繋がりの鍵を握る生き物のことを「キーストーン種」と呼ぶのだそうです。

上野動物園の方に、キーストーン種についてすごく分かりやすい話を聞いたので、それもお伝えしたいと思います。その方はキーストーン種の話をするとき飛行機に例えるんだそうです。地球の生き物が飛行機の一つ一つの部品になっているとして、その飛行機が飛んでいるとします。キーストーン種というのは繋がりの鍵を握る大事なボルトだったり、エンジンの部分を止めている留め金だったり。それを外すとババーっと全て崩れて落ちてしまう。だから繋がりの大事な所のボルトを取ったらみんなばらばらと崩れ落ちちゃうっていう話なんですね。ポイントは、人間もその飛行機に乗っているっていうこと。人間だけが特別で助かるわけじゃない。生き物というのはみんな食べたり食べられたり、助けあったりして繋がっていて、全てで全体のバランスを作っているので、ひとつ消えると、その周りの生き物達もバランスが崩れて、つぎつぎと加速度的に消えてしまうこと

になる。今、生き物が消えていくスピードというのは、自然のスピードの百倍から千倍と言われています。このまま生きものが消え続けていけば、いつかは、人間が消えてしまうことになるかもしれません。

もったいないばあさんのメッセージは、「地球は生きものすべてみんなのもの。地球が美しく豊かな星なのはいろいろな生き物がいるからこそ。みんなで自然のバランスを作っているんじゃよ」。

4　土地が荒れる

問題の4番、「土地が荒れる」。この問題はさっき、森が消えるなどでかなりお話をしてしまったので、ちょっと飛ばしていきたいと思います。森は雨の始まりとも言われていて、森が消えるとその地域の天気もおかしくなることにも繋がっています。水を蓄えていた森が無くなることで、川下で洪水が起きたり、雨が降らなくなって土地が干上がってしまうこともあると言われています。一度土地が干上がって砂漠になってしまったら、もう簡単に元には戻らない。農薬や化学肥料で土地が荒れてしまったところもあります。

もったいないばあさんのメッセージは、「目先の利益だけで自然のバランスを崩してしまうと、すべてを失うことになりかねない。最後に残るのは荒れた土地だけになっちゃうよ」。

5　食べものが足りない

問題の5番、「食べものが足りない」。世界では6秒に一人の割合で子供達が食べ物がないという理由で命を落としているそうです。子供達に「みんな、クラス何人？」と聞くと、たいてい30人から40人くらいと言います。「一クラス30人のクラスだったら、3分たったらみんないなくなってしまう。3分毎にクラス全員がいなくなっているくらいのスピードで、子供達が食べ物が食べられなくて命を落としているそうです」と話します。どうして食べ物が食べられないかというと、その多くは、お金がなくて買えないからという理由です。貧しくて食べ物を買うお金がないから。戦争をしていて

食べ物が入ってこないという理由もあると思います。それで命を落としているたくさん子供達がたくさんいる。この写真はユニセフさんからお借りしたものですが、栄養不良の子供です。そういう子供達が病気になると、命を落としてしまう確率が高いんですね。

皆さん、日本の自給率を御存知ですか？　約40％。それはテーブルの上に10個食べ物があったとすると、そのうちの4個だけが日本で作られていて、あとの6個はお金を払って外国から買ってきたものということです。それなのに、10個のうち3個も残していると言われています。本当にもったいないことです。この間の震災直後に関東圏のスーパーに食べ物が無くなった時期がありました。食べ物が入ってこなくなって、「買いだめ」という問題が起きたりしていましたが、その時に思ったのは、「もしも世界の国で日本と同じような災害が続いて、日本に食料が入ってこなくなったら、いったいどんなパニックになるんだろう」っていうことでした。自給率を上げていかないと、そういう心配が現実になる危険もあると思います。「地産地消」という言葉がありますが、その地域で獲れたものをその地域で消費しようということ。基本的にはその土地で獲れたものをその土地でいただく方が、新鮮なものが食べられるし、移動するためのコストやエネルギーのことを考えても、その土地で消費していく方が自然にやさしい取り組みだと思うんですね。作った人の顔が見られれば安心して食べられると思うし。「ローカライゼーション」って知っていますか？　地域を大事にしようっていう言葉なんですね。皆が、その土地で作られた食べ物を安心して食べられるようになればいいなと思います。

もったいないばあさんのメッセージは、「日本では、テーブルの上の10個の食べ物のうち6個が、外国で作られて運ばれてきたもの。それなのに10個のうち3個を残しているんじゃよ。もったいない」。

6　きれいな水が飲めない

問題の6番、「きれいな水が飲めない」。日本は水が豊かな国で、蛇口をひねるとジャーってお水が出てきますが、世界では6人に1人がこんなふ

うに雨が降ってできた水溜りのような汚い水を飲むしかない環境で暮らしているそうです。あと、トイレがない生活をしている人が３人に１人いるそうです。もったいないばあさんのワールドレポート展の内容を基にしたTV番組を作ったことがあって、その「もったいないばあさんと考えよう世界のこと」という番組の取材で、インドやバングラディッシュなどの国に行ったことがあります。DVDにもなっています。DVDには、そんな踏み込んだ内容の映像も入っていますので、皆さんが学校の先生になられた時にはぜひ、国際理解や人権の授業を行う時に使っていただけたらと思います。

バングラディッシュの洪水というのは、わーっと鉄砲水みたいに来るのではなくて、水が引かず、ずーっと水浸しの状態が続いているんだそうです。トイレがない生活では、自然のトイレで、その辺でするわけです。子供達は家の前でしゃがんでする子もいます。水はNPOの方々が頑張って、わりとスラムでも井戸が設置されているところが多いそうですが、洪水が起きると、井戸もうんこやおしっこも全て全部まぜこぜになってしまうので、それでもう水が飲めなくなってしまったり、汚い水を飲むことで、感染症が広がる心配が出てきます。今、東北の方でも瓦礫の中から蠅が発生して、感染症が心配されています。抵抗力の低い子供達は命を落としてしまう危険もあります。この写真にも、後ろにロバみたい動物が写っていますが、動物達もその辺でうんちやおしっこをしますので、不衛生な状態です。それから水汲みの問題もあります。一日がかりで家族のために水を汲みに行く子供達がいます。水汲みのために学校に行けなくなることもあります。この水の問題が日本とどう関係があるかというと、やはり食料自給率の問題が関係しています。作物を育てるためにも水は必ず必要なんですね。食料を輸入するということは、そこで使われた水も輸入していることになると考えられています。水の取り合いで戦争が起きる国もありますが、水は生きていくために誰もが必要なもの。だからこそ分け合わなければいけない。誰かがもっとと思って多くとると、誰かの分がなくなってしまう。

もったいないばあさんのメッセージは、「みんなが必要なものだからこそ、分けあわなきゃいけないね」。

7　戦争が起こる

問題7、「戦争が起こる」。世界では今でも約30から40の地域で、戦ったり争ったりしています。アフリカにシオラレオネという国があります。ダイヤモンドの利権を巡って争いが絶えなかった所なんですね。これはそのシエラレオネで足を失った元子供の兵士の写真です。誰かから物をとろうしたり、自分達とは違うということで戦ったり争ったり。子供達には、「みんなは、人からものをとったり、自分と違うからって誰かを苛めたりしてはいけませんって知ってるよね。そういうことを知っていたら、戦争する大人にならないと思うから、ならないでね」って話をします。

もったいないばあさんのメッセージは、「奪い合いや殺し合いは、幸せな生活を壊すだけではなく、心に大きな傷を残すものじゃ。戦争ほどもったいないことはない」。

8　難民が生まれる

問題の8番、「難民が生まれる」。この写真はチャドの難民キャンプです。難民と国内避難民を合わせると、その数は約6,700万人と言われています。戦争が起きて逃げて来たり、雨が降らず土地が干上がって砂漠になり、作物が育たなくなったため、移り住むようになった人達もいます。問題があると、難民が増える。だから、世界が平和になれば、難民もいなくなると思うのです。

もったいないばあさんのメッセージは、「地球の問題を解決しない限り、いつまでたっても難民はなくならない。早く難民のいない世界になったらいいね」。

9　子どもが働かされる

問題の9番、「子どもが働かされる」。児童労働という言葉があります。

先週の日曜日は児童労働の日でした。ILO（国際労働機関）の発表では、世界で働く子供達は約2億1,500万人と言われています。この本では、ユニセフ独自の調査の数字で、約1億5,800万人と書いてあります。子供を隠したり年齢をごまかしたりするので、実際には何人いるのか分かりません。けれども、数えきれないほどの子供達が働かされています。

この子はエルサルバドルで1日12時間木炭を袋詰めする6歳の男の子。子供というのは単純な作業を力づくでさせることができ、しかも安い賃金で働かせることができる。中には、さらわれて子供の兵士にされる子もいます。2週間くらい戦う練習をさせられるそうです。2週間くらい子供に銃を持たせて、こうやって撃つ、隠れるという練習をさせて、すぐに前線に送り出してしまう。子供だから怖いって思うじゃないですか。そうすると麻薬を注射して、ぼーっとしたところで子供に銃を持たせて撃たせる。そんなふうに兵士にされている子供達は世界に約25万人もいるそうです。

まるでロボットみたいに、機械のように扱われてしまっています。子供にだって、嫌だって思う心があるのに。

インドに行ったときに、ドライブインで働いている12歳の男の子に会いました。インドのドライブインでは、皿洗いとして働く男の子ががたくさんいるそうです。その子は、「学校には行ったことがない。朝8時から夜8時まで働いている」と話していました。雇い主に聞いても、子供の年齢をごまかしたり隠したり、「家族だから手伝っているだけ」とうそをついたりします。だから、実際に何人の子供達が働かされているのか、本当の数は数えられないのです。この12歳の男の子のことは、インドのNPOにお願いしてレスキューの対象にしてもらうことになりました。

救出されたリハビリセンターの子供達に、働かされていたときのことを聞くと、本当に危ないような目に遭っている。閉じ込められて働かされていたとか、炎天下の中で水も食べ物も十分ではない状態で働かされていたという子もいました。私達の持ち物の中には子供達が働いて作った物が含まれているかもしれません。チョコレートかもしれないし、Tシャ　かもしれない。

働く子供達は学校に行っておらず、読み書きとか計算ができない。できないから、将来いい仕事に就くことができず、貧しい生活からずっと抜け出せない。子供にはみんな、元気に育ち、幸せに生きる権利がある。でも、学校に行けず働かされている子供達は未来への希望を持つことができません。子供達は地球の未来を作っていく人達。世界の宝なのに。

もったいないばあさんのメッセージも、「子供は世界の宝。子供を守り育てることは、とても大切なことなんじゃよ」です。

インドに取材に行った時のテレビ番組で言ったことですけど、学校は、読み書きだけを勉強するところじゃなくて、そこで友だちを作ったり、ルールを守ったりすることを知ったり、社会性を身につけたり、の場所でもあると思います。働くだけの世界と、損得勘定だけで生きていると、お金もうけで価値を決める大人になっちゃうかもしれない。子供達には、何が良くて何が悪いか、ちゃんと分かる大人になってもらいたい。だからこそ学校で勉強することは大切だと思うんです。

10　お金持ちと貧しい人の差が広がっている

最後の問題ですが、10番「お金持ちと貧しい人の差が広がっている」。「格差」というのは、最近日本のテレビでもよく耳にする言葉ですが、お金持ちはもっとお金持ちに、そして貧しい人はその貧しい暮らしから抜けられず、その差がどんどん広がっているということです。この写真はバングラディッシュのスラムです。床が水浸しで、ばい菌がうじゃうじゃいるんじゃないかなって思うような所もありました。世界に10人の人達がいるとすると、そのうちの2人は金持ちで、あとの8人はお金持ちじゃない。8人のうちの1.5人はもっとも貧しい暮らしをしている人達、最貧困層と言われていて、約10億人もいるそうです。私達日本人は、お金持ち2人のうちに含まれています。テーブルには食べ残しをするほどの食べ物が並んでいて、水道をひねればきれいな水が出てくる。お誕生日には何を買ってもらうか迷うほど、物が溢れている。その一方で、世界には、子供達が学校に行かず働いても、その日食べる物も買えないほど貧しい人達がいる。

水汲みをして学校に行けない子供達もいます。兵士として戦わされている子供達も。同じ地球にすむ地球人なのにどうしてこんなに違うの？　なんでこんなに違いがあるんだろう？　と思います。

なぜか？　は、私達がお金で物を買う社会の仕組みの中で暮らしていることにあります。豊かな生活をするためにお金を得ることが一番に考えられてしまっている。一番始めに、命よりも先に考えられている物はなんだろうって言いましたが、それはお金を得ることなんですね。お金があれば、安全できれいな水が出る所に住み、食べ残すほどの食べ物を買うことができる。けれども、お金がないと何にもできない。お金がないために、食べ物を買えない人達がいる。お金がなくて子供達が学校に行かず働くことにもなる。学校に行かないからずっと貧しさから抜けられなくなる。

また、貧しい暮らしでは犯罪が増えます。買えないから人の物を盗ることになる。そうすると争い事が起きてしまう。それがテロに繋がっていったり、紛争とか戦争に繋がって、難民になってさらに貧しくなってしまう……。貧しさから森の木を切って、結局その土地は作物が作れない荒れた土地になってしまう。もともとはそこで自給自足していたのに、お金を得るために森の木を切ってしまって、そこに住めなくなって難民になってしまう。そして、難民になって移動すると、もともとそこに、移動先に前から住んでいる人達と争いごとになる。それでまた戦争が起きてしまう。そして、ずっと貧しさから抜けられない。そういう人達がたくさんいるんです。

これまでお話ししてきたように、そういう人達の暮らしも、私達と繋がっています。もしかしたら、私達の暮らしの中にも森の木を切って作ったものが入っているかもしれない。もしかしたら、子供達が学校に行かないで働いて作った物があるかもしれない。もしかしたら、私達のテーブルの食べ物の中には、貧しい人達の国から入ってきたものがあるかもしれない。天気がおかしくなって食べ物が足りなくなると、値段が上がります。私達が買うことで、その人達はがますます買えなくなるかもしれない……。

私達はこの地球の上の地球人として、繋がっています。自分さえよけれ

ばという考えを持たずみんなで分け合う。「分け合う」ってものすごく大事だと思うんです。足りないとなった時、パニックになって買い占めに走るのではなく、冷静に行動することが大事だし、まずは一番必要な人に、そして分け合う。パニックにならないでみんなが思いやりの中で生きていける安心感が持てる社会になればいいですね。

もったいないばあさんのメッセージは、「自分さえよければという考えを持たず、分け合う心があれば平和な世界に必ずできる。どうしたらみんなで平和に暮らしていけるかを考えていこう。できることをやらないなんて、もったいない」。

そして、最後のメッセージは、「命はすべて繋がっていて、ひとつひとつの命が大切なんじゃよ」です。

世界に暮らす10人の子どもたち

今度は世界の問題に巻き込まれている10人の子供達を御紹介します。これはユニセフのホームページで紹介されている子供達の実話を基に、私がお話とイラストをかきました。実際にこういう子供達がいると思って聞いてください。

――『もったいないばあさんと考えよう世界のこと』（講談社）に収められている「世界に暮らす10人の子どもたち」の朗読を通して、児童労働や地雷被害、少年兵、水汲みで1日がかり、ごみ拾い、ストリートチルドレンなど、世界の子供を取り巻く問題を紹介。――

おわりに

いろんな子供達を見てきました。日本にもつらい状況の子供達がたくさんいますけれども、世界にもとても多いです。そういう子供達と世界の問題が私達の暮らしとどんなふうに繋がっているか、その全体像を今日はお伝えしました。これをきっかけに、自分には何ができるか、今後どういう

ふうに暮らしていくかということを考えていただけたらいいなと思います。DVD「もったいないばあさんと考えよう世界のこと」では、もう少し伝えたいと思ったこともお話しています。自分に何ができるのか？　もしも海外にボランティアに行ったり、寄付ができたりするなら、それはもちろんした方がいいと思います。助け合いとか支え合いというのは必要だし大事だし、できるならやったほうがいい。でも、遠くまで行けなかったり、お金がなかったりしても、自分ができることを身の回りですればいいのだと思うんです。自分が住んでいる町を、子供達が笑顔で安心して暮らせる町にしたいって思うこと。それでいいと思う。インドに取材に行った時にも感じたことですが、つらい状況の中で生きている子供達には笑顔がありません。でも貧しくても家族と一緒に住んでいたり、家のお手伝いという感覚で働いている子達には、笑顔がある。だから、笑顔があるかないかが分かりやすい。子供達は、楽しいと笑うし、楽しくないと笑わない。希望がない状態で働かされている子供達には笑顔がない……。

DVDでお伝えしているメッセージは、自分が住んでいる町を子供達が笑顔で安心して暮らせる町にしたいと、みんながそう思ってできることをすればいい。例えばパトロールしたり、ゴミを拾ったり……、自分の町を子供が笑顔で安心して暮らせる町にするために、それぞれが自分にできることをすればいい。「そうすれば、その町に住む人はみんな幸せだと思うじゃろう。そういう町が世界に広がって行けばええんじゃよ」というような内容です。子供達には、自分のことだけでなく人のことも考えられるような大人になってもらいたいです。

『ミ　バチの羽音と地球の回転』という映画を御存じですか。鎌仲ひとみ監督が作った映画で、最近それを観て感銘を受けました。日本の祝島で原発反対運動をする人々と、スウェーデンの自然エネルギーについての映画です。スウェーデンには、全て自然からの力を利用する暮らしに変えて行こうとしている人達がいます。その地域で作られた物を食べ、うんこやおしっこも肥料として使い、全てが循環する暮らしを目ざす人達。自然に感謝して大切に守りながら、自分達の暮らしに生かしていく。危なくない

し、全てが役に立つ。

もったいないことがない。私達もこんなふうに暮らして行けたらいいなあと思いました。2つの映画とも、機会があれば、ぜひご覧になってください。

今日は、私の話を聞いてくださりありがとうございました。皆さんが暮らしの中で、地球の問題と自分達が繋がっていることを感じ、自分さえよければではなくて分け合うこと、自分にできることは何かと考えていただけたらうれしいです。ありがとうございました。

（2011年6月14日　テープ起こし：山口政之）